

「八つの頭に八つの尾。背には杉などの木が茂り、森林と化している。毎年、娘を一人ずつ食べに来るという恐ろしい生き物。妖怪とも神ともいわれる、伝説の存在。」

このようなヤマタノオロチの説明文は、今まで何度も聞いてきました。神話の読み聞かせや、神話のDVDなど、方法は様々でした。日本神話の中心地、出雲大社のお膝下に住む大社町民としては、当然のことだったのかもしれませんが。小学校高学年の頃には、これぐらい常識の内だ、とまで思っていました。

嫌と思うまで聞かされ続けてきた、ヤマタノオロチの神話。でも、最近になって初めて知ったことがありました。神話の一説です。

「ヤマタノオロチの正体は、斐伊川である。出雲平野を流れる斐伊川は、何度も洪水を繰り返し、その度に流れる場所を変えてきた。出雲の人々は、暴れる川を龍に例え、ヤマタノオロチ伝説がつけられた。」

いつも退治されて終わる神話に、こんな続きがあったなんて。純粋に驚いたのを覚えています。そして考えました。じゃあ、出雲の人と斐伊川は何度も戦ってきたのだな、と。

私の家には、私の住む地区の歴史が書かれた本があります。そこに載せられた写真の中に、出雲平野の北、遙堪地区の水田地帯が水没したというものがありました。谷川の氾濫が原因で、その光景は「まるで古代を再現したよう」と書き添えてあります。

祖父に話を聞くと、あのあたりの水田地帯は、大昔は斐伊川が流れていた湿地帯だということです。水はけが悪いので、稲作には向いていても、一度洪水が起こると大変だったそうです。私の住む地区でも、人と水とは戦っていました。

私の身近な歴史を見ていくと、出雲の人と水とは宿敵であるかのように感じます。確かに水というのは、自然災害の原因であったりします。現代でも豪雨災害や津波などが起き、多くの人が水と戦っています。

でも、本当に水は敵なのか。とても身近なことなのに、疑問に感じました。人間が生きていられるのは水のおかげな訳だし、水のない生活なんて考えられません。出雲市の家が使っている水は、斐伊川から引いた水だと聞きました。それに第一、斐伊川が無ければ、スサノオノミコトはヤマタノオロチを倒すことはできなかったはずですよ。

私にとっての水・川は、自然そのものです。通学路にある水田の用水路は、冬は水は通っていませんが夏になるときれいな水が速く流れていきます。見るだけで涼しい気分になれる、夏の知らせのようなものです。私の家の近くには観光施設があり、そのすぐ後ろには横幅二メートルほどの川が流れています。近くを多くの車が通っているはずなのに、メダカやザリガニなどの住む、自然の一部です。

その川をのぞき見ながら、父や妹と散歩をしたこと。小学校の帰りに、用水路に草を流し、友達と速さを競って遊んだこと。たくさんの思い出を作りました。

多くの人を苦勞させた水。でも、その苦勞を乗り越えてくれた出雲の人々のおかげで、私は今、水とともに暮らしています。

やっぱり、人と水は宿敵などではありませんでした。はじめは仲の良くなかった友達との付き合い方をようやく知ったような、互いの希望を聞き合っ、問題を解決したような。切っても切れない縁で、人と水はつながっているようです。今回、改めて実感しました。

斐伊川と、水害と戦ってきた出雲の先人たちは、現在の私たちの水との暮らしを、どう思っているのでしょうか。きっと、微笑みながら見ているのだと思います。

スサノオノミコトの声が天から聞こえてきそうです。「オロチ退治は、出雲の人々に任せるとしようか。」と。